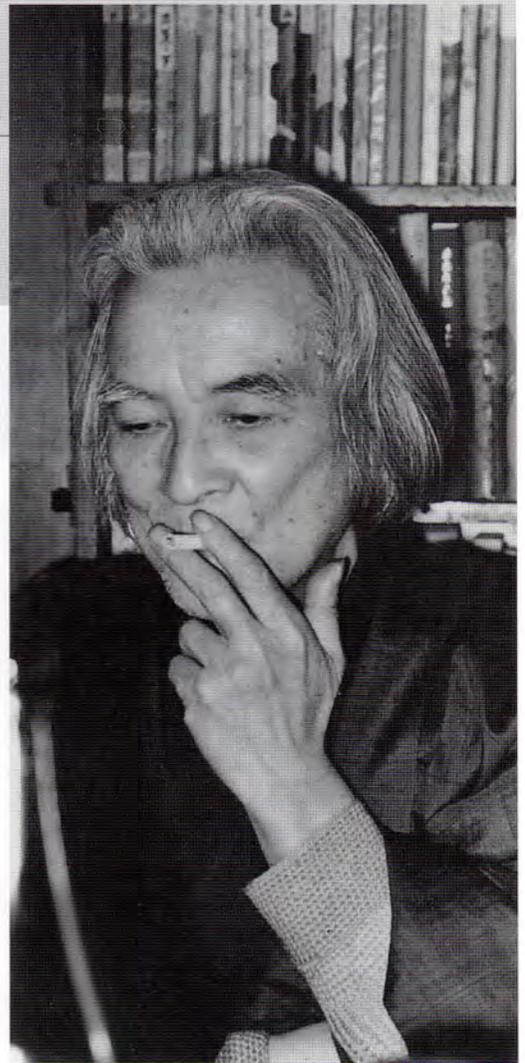


新 歌人群像

坪野哲久

時代と対峙した歌人

松坂 弘



文学への開眼

坪野哲久は明治三十九年九月一日、石川県羽咋郡高浜町（現在の志賀町）に生まれた。父次六と母よねの四男。父の本家は肝煎（北陸、東北では名主をこう言った）出で、加賀藩の末裔だといふ。

大正十一年（十六歳）、代用教員の資格を取るために松本教育実業学校に学び、友人たちと文芸回覧雑誌を作った。これが彼の文学開眼と言えようか。

翌十二年に上京。働きながら神田の英語学校に通う。その年の九月、関東大震災に遭遇する。そのため、やむなく帰郷する。

大正十四年四月、再び上京し、東洋大学に入学する。このころ「アララギ」に参加、友人の斡旋で晩年の島木赤彦に指導を受けるが、赤彦は翌年三月に亡くなってしまふ。やがて坪野は、大学の短歌会のメンバーの影響で「ポトナム」の同人となる。これが本格的な短歌活動の開始と言えるだろう。

昭和二年、合同歌集『冬月集』に参加、次のような歌を発表している。

すかんぼの青める丘のなだり道物思ひ
くれば波の音きこゆ 〔冬月集〕
天ぎらひひた降りおつる雪屑は吹雪と
なりて森をめぐれり 同

いずれも郷里高浜での囁目詠。写実をふま



えた瑞々^{みずみず}しい作品で、調べにも張りがある。

昭和四年三月、東洋大学を卒業。東京ガスの作業員となり、関東自由労組に加入する。当時は世界的に経済不況の嵐が吹き荒れた。労働争議や農民の小作争議が各地で頻発した。彼は全協日本化学労組に参加、次第に労働運動にもめりこんでゆく。夏には渡辺順三、伊沢信平らとプロレタリア歌人同盟を結成、前川佐美雄、矢代東村らが参加した。このころの短歌は歌集『九月一日』で知ることができる。

組織の仕事を互いに語る時馬ぢやない
人夫ぢやない力が湧き上る 『九月一日』
あぶれた仲間が今日もうづくまつてゐる
永代橋は頑固に出来てゐる 同
完全に自由律短歌である。社会批判をうたうためには定型ではうたいきれない。そういう認識をこのころ彼はつよくもつたのだろう。歌壇でも定型から自由律に移る人が増えた。

彼のこういう傾向はしばらく続いてゆく。昭和六年三月、山田あきと結婚する。しかし、労組活動によりしばしば検挙されたり、病魔に襲われたり、山田あきの献身に負うところが大きい。やがて二人は比翼歌人としての地位を確立してゆく。

昭和十四年、歌集『百花』を刊行している。再び定型表現に戻っているが、やや破調感覚の作品が交じっている。

母のくにかへり来しかなや炎々と冬
濤^お圧^{あし}して太陽没む 『百花』

土間の冷え素足^{すあし}にひびくこの夜^よころ胎
動しきりなる妻を早寝さす 同

西行の出家遁世はうなづかねどこころ
しづかになりんにく劑^のを嘔^のむ 同

一流歌人として

彼の一流歌人としての評価は昭和十五年、合同歌集『新風十人』に参加したことにより決定的なものとなった。現実をうたいながらも象徴的な興行きをも見せ始めている。

冬星のとがり青める光もてひとりうた
げすいのちとげしめ 『新風十人』

坂のうへに白菜積みあげしトラックが
急停止して秋はふかけれ 同
向日葵をきみは愛^おしめり向日葵の種子
くろくろとしまりゆく頃ぞ 同

この年は、歌集『桜』も刊行している。旺盛な活動ぶりを示していると言えよう。この『新風十人』では、定型表現に完全に戻っている。これにより、乾いた叙情の獲得を果たした。彼の時代への熱いメッセージの発信は気魄^{きぼく}あふれるものになった。

戦時下の数年間、哲久は治安維持法違反の廉^かでしばしば当局から検挙され、起訴され、さらには胸部疾患に侵され、といった具合で波乱に富んだ心休まらぬ日々を送っている。また職業でも苦勞している。出版関係の仕事についていたり、映画関係の仕事についていたり、まことに波乱万丈である。戦後も定職にはつかなかったので苦しい生活が続く。

戦後すぐ、昭和二十二年に歌集『新宴』『一樹』を刊行するが、彼の本格的活動はそれから約十年後の、昭和三十三年刊行の歌集『北の人』あたりからと見られる。若き日に見せた瑞々しい叙情を取り戻し、緊迫感ある調べを確固たるものとした。ふと漢詩を思わせるような語彙^{ごい}の斡旋^{わくせん}による硬質な調べの創出も、新たな境地として指摘できる。

坪野哲久

あたらしき世界国家のあくがれを説く
ともあらず子と地球儀まはす 「北の人
ふるさとと瀟の秀尖に霰打つ火花よ白
くわがゆめに入る 同
妻を得てたかぶりし日の白うつぎこの
木の花もわが財としき 同

憤怒の人

昭和三十年代から四十年代にかけての歌壇は、いわゆる社会詠が盛んであった。同人誌運動も加熱していた。日本経済の高度成長期とも重なり合う。第一次安保闘争もこの時期に行われた。社会は輻輳した形で揺れ動いた。戦前からずっと時代と対峙してきたという自負のある坪野は、歌壇の騒々しさとは違つて、冷静沈着さを保ちつつ、時代への怒りをうたい続けた。

彼の作歌への理論は『新風十人』に寄せたコメントが如実に語っている。「歌は、よかれあしかれおれの生き方をあからさまに反映するものである。生き方が低ければ歌そのものも低弱にしか現れない。生活意欲が遅しく、おのれの掬りどころが高きにあれば、歌そのものがおのづからにして氣息の充溢した

ものとなつて現れるであらう」。

まことにもって明快と言わなければならぬ。彼の思想は戦時下から毫も変わっていないのが理解される。

さて、昭和四十六年に刊行の歌集『碧巖』は、この時期の成果であると同時に、彼の文学的な到達点をも示している。「北の人」の世界をさらに深め、充実感に満ちている。この歌集は読売文学賞により祝福を受けた。

われの一生に殺なく盗なくありしこと

憤怒のごとしこの悔恨は

『碧巖』

碧巖をよむもこの期にあそびごとただに茫然のときあらしめん 同

むらぎもは忿怒の錘あわれあわれ老いやすらわぬいのちなるべき 同

この歌集には「憤怒」「忿怒」などと言った激しい語彙が多く使われている。勿論、この憤怒は時代へのものである。しかし作品中の語彙は緊密な調べにほどよく調和している。

かつて私はこの歌集を読んで、坪野を「憤怒の人」と評したことがあった。これに「冷徹なる」という言葉を冠すれば、今に生きる評だと私は考えている。

なお、昭和四十八年刊行の歌集『春服』は、『碧巖』より刊行は後だが、制作年代順では



1938(昭和13)年、江戸川公園で(32歳)

『碧巖』に先立つ。やはり秀歌が多い。

木琴の音ひびかせて春分の路地きらき

らし木の芽のひかり

『春服』

枇杷の実はいちさきながら百あまり黄に充ちてありあなどりがたし 同

歌集『春服』『碧巖』は単に坪野短歌の達成点を示すだけではなく、「時代」というような人間を包み込んで滔々と流れる巨大な「魔物」をうたう現代短歌の表現手法の到達点をも示している。

歌集『碧巖』で見せた勢いは、昭和四十九年刊行の『胡蝶夢』、六十三年刊行の『人間日暮』に続く。いずれの作品も「豊穣」感があふれていて読み応えがある。

雪まんだら万朶の雪の莊嚴のゆめうつつなる春の昏れがた

『胡蝶夢』



1975 (昭和50)年、上野公園で夫人の山田あきさんと
(片山令子氏撮影)

北くには木枯の里雪の里夜半の夢さえ
すさぶならずや 同

絶壁にひとり立つ二十代の感覚のいま
だも消えず白髪しごく 同

友人の死や身辺の変容をとりあげた素材が増えているのは、六十代の半ばの作品集として当然のことだろう。しかし、自らの生き方への積極的な対峙の仕方には相変わらず気魄が漲っている。これは正に、坪野が青春性を永遠のものとして謳歌しようとする自分自身へのメッセージであろう。

「調べ」の創造びと

昭和六十三年刊行の歌集『人間旦暮』は、生前刊行の最終歌集となった。「春夏篇」「秋冬篇」から成り、作品の全てに日記風に日付がつけられている。総歌数一二四〇首、優に三冊分の分量である。しかも驚くべきことに、六十二年一月一日から十二月三十一日までの一年間の作品集である。ところどころ欠けている日はあるものの、三百日以上、ほぼ毎日歌を詠んだことになる。大変なエネルギーと言わなければならない。坪野はこのころ、前頸部癌を病み、それが進行しつつあったので、早く歌集を刊行しておきたい願望によるものである。それにしても、我々は彼の気魄、生命力には激しく圧倒させられるのである。

烏瓜壁につるせばここが秋しゆらしゆ

らしゆらとひとりあそばな 「人間旦暮」

歌という小形式をさいなみて死ぬべき

われかそれもよからう 同

わが地球の冬の身震いうつし身と一体

なるをいとしみにけり 同

憎むより愛することのやすらぎをわが

生涯の結語となさん 「拾遺」

いずれの歌も、生きて在ることを自らの「拠点」として、宇宙へ地球へ時代へ人間へ短歌への熱いメッセージとして読み取れる。

近・現代短歌の歴史を辿ってみると、時代と対峙し、時代を告発した歌人は大勢いる。

坪野とプロレタリア歌人同盟を結成した渡辺順三をはじめとして、矢代東村、佐々木妙二、館山一子など枚挙にいとまがない(系列こそ異なるけれども、近藤芳美なども時代と対峙し、時代を告発した歌人として数えることができるだろう)。しかし坪野は、それらいずれの歌人とも異なった世界を成熟させた。特記すべきは、緊張感のあふれる調べの創造であろう。プロレタリア歌人同盟系列の歌人の多くは自由律に走り、スローガンの短歌をつくることに終始した。しかし坪野は、短歌を短歌たらしめている五七五七七の調べを無視することがなかった。そこが評価の分かれ目になっている。

しかし、執念をもって纏めた歌集『人間旦暮』を、坪野はついに手にすることなく昭和六十三年十一月九日に亡くなった。だが、平成五年に拾遺作品を収集して『坪野哲久全歌集』が刊行された。歌人としてまことに幸福だと言えるのではあるまいか。

(まつぎか・ひろし)「炸」代表